この本は社会学的思考法 (=理論)の入門書です。まず、映画を用いて社会学的思考を解説するところから入ります。映画を用いることは単なるわかりやすさのためのみではありません。映画によって読者の想像力を刺激し、活性化しようとするためでもあります。

かつて社会学理論が文学から影響をうけていることが注目されました。文学を社会学の枠組みを使って分析するにとどまらず、さらに文学から刺激をうけ理論がつくられたり改良されたりしました。たとえば、A. シュッツが『ドン・キホーテ』から多元的現実のアイディアを得たり、D. リースマンが『アンナ・カレーニナ』の登場人物から、内部指向型人間と他人指向型人間などを類型化したことが知られています。そして日本でも、作田啓一『個人主義の運命』(岩波書店、1981年)、作田啓一・富永茂樹編『自尊と懐疑』(筑摩書房、1984年)などの試みが知られています。

社会学の大きな目標は、人間や社会の「リアル」に迫ることです。リアルは、 事実と等号では結べません。近年、社会学的思考や想像力に乏しい実証研究が 増えています。リアルとはデータの積み重ねのみでつかみ得るものなのでしょ うか。バーチャルな世界も拡大しつつ、事実とリアルの関係が変容していくな かで、社会学的思考や想像力はリアルをとらえる上でますます重要な鍵となっ てきているように思います。

社会学的思考を豊かにし、想像力を取り戻そうとするとき、その誘因を文学のような文字テキストに限る必要はありません。映画『羅生門』はライフストーリーの領域で使われる「羅生門的手法」(Rashomon-like technique)の生成に寄与したことが知られています。「物語」という構造をもっているという点では、多くの文学も、映画も、さらにいうなら社会学的思考も同様です。わたしたちは映画の想像力、そしてその表現の可能性に畏怖や敬意をいだかざるをえません。本書でとりあげた映画は、ほとんどフィクションです。したがって、事実

にもとづく経験科学としての社会学とは合わないと考える人もいるかもしれません。しかし、かえって想像力に富むフィクションという思考実験が、人間や社会のリアルを見せてくれることもあるのです。

映画を見終わったあと、世界が違って見えることがあります。社会学もある 理論を知ったあと、おなじような感覚をいだくことがあります。そのような感 覚を少しでも味わっていただければ、本書はとりあえずの目的を達したといえ ましょう。

以上のことを考えて、本書は章ごとに次のような構成をとりました。

- 1 映画から入って、思考法のもととなるイメージをつかみます。
- 2 社会学的思考を、ときどき原典の引用も入れながら解説します。
- **3** さらに展開し、さらなる思考の発展や他の思考法との連関を図ります。

まず1,2で映画から入り、思考法の基礎と概念の基本は理解できると思います。さらに3で、映画が執筆者の社会学的思考をいかに刺激して、どのように発展させたのかも楽しんでいただこうと思います。

この本の特徴をもう一つ述べます。それは、読者とさまざまな社会学的思考の距離をはかれることです。誰でも社会学的思考に対し、好き嫌い、合う合わないがあります。それは、個人の理解力や思考法固有の難易度のようなものに還元できません。いくら理解できても、あまり自分に合わない思考法ばかり学んでいると社会学が嫌いになります。いくら好きだからといって、同じ思考法ばかり使っていると、幅や柔軟性がなくなります。そのような行き詰まりの際に、本書はリトマス試験紙的役割も果たします。

本書では20の思考方法を I, II, IIIに分けています。 I 「社会学的思考に慣れる」は、基本的思考としてまず知っておきたい社会学的思考の典型的かつ根本的なものです。いろんなものに使え、古びない強い思考法です。 II 「社会学の視野を拡げる」は、社会学から多少越境していますが、社会学を豊かにしてきたものです。 II 「現代社会を読み解く社会学」は、より加工度、洗練度の高まった理論で、現代社会を読み解くのに便利なものです。

本書で紹介する社会学的思考(=理論)は、欧米の文化的背景のなかで生み

出されたものです。今回は入門者にもわかりやすく、記述にも統一感をだすため、素材として文化的背景の異なる日本映画に限定して説明を試みました。理論と具体的な事象の間には、つねにねじれがあります。そのねじれを個々の執筆者がどのように取り扱っているかも、興味深い点となっています。

本書を読み、想像力を高め、さらにさまざまな映画や書物にすすんでください。この本はそういう触媒としてあります。この本を読むことは、おわりではなく、はじまりなのです。

謝辞:企画から本として流通するに至るまで,つねにともに歩きつづけ,導いてくださった編集者掛川直之さんにお礼申し上げます。掛川さんがいなければ,抽象的なイメージを、本という実体としてまとめることはできなかったと思います。

また,企画の段階から折りにふれて相談にのって下さった井上義和さん,近森高明 さんにもここに謝意を表します。

2016年5月

西村 大志 松浦 雄介